紫波町文化財調査報告書2022

町内金鉱山遺跡詳細分布調査報告書

紫波町教育委員会

紫波町文化財調査報告書　町内金鉱山遺跡詳細分布調査報告書

令和5年3月　紫波町教育委員会

紫波町文化財調査報告書 2022

町内金鉱山遺跡詳細分布調査報告書

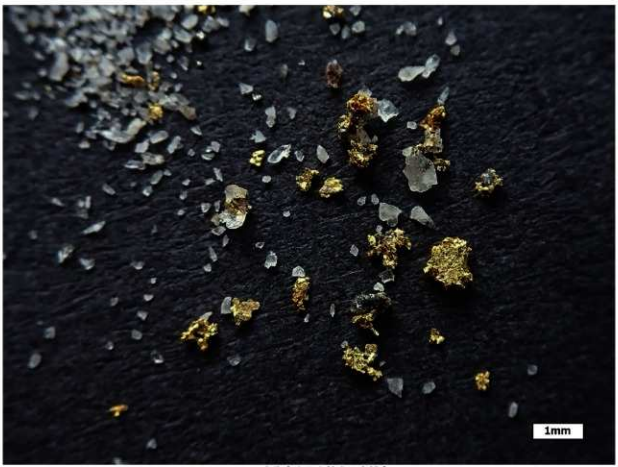
金山踊絵はがき（盛岡田口商店発行，明治 40 年頃，紫波町教育委員会所蔵）

令和５年３月

紫波町教育委員会

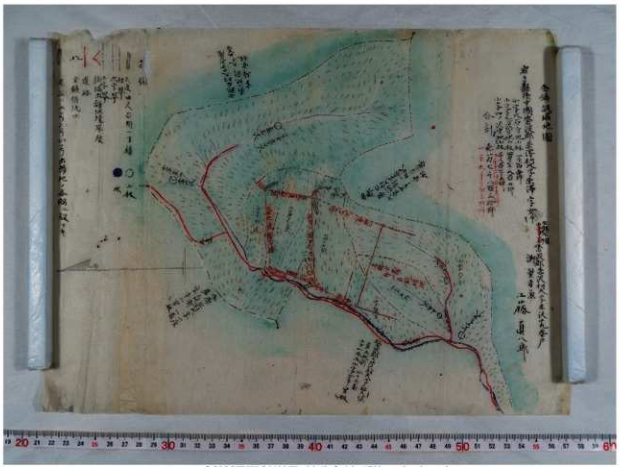
金山踊絵はがき（明治 30 年代：紫波町教育委員会所蔵）

「金山踊」は、盛岡藩領の各鉱山で作業唄として歌い継がれてきた「からめ節」が、明治期に座敷芸として盛岡の花柳界に取り入れられたもの。「からめる」とは鉱山用語で砕いた鉱石から金粒を回収する作業のこと。盛岡芸妓に伝わる金山踊は秋田県鹿角市の「鹿角からめ節」と紫波町の「佐比内からめ節」を元にしたとされる。舞手の前掛けに染め抜かれた「大直利」とは鉱脈の富鉱部を意味し、金山踊は金鉱発見とそれに伴う景況を喜んだ様を表しているともいわれる。



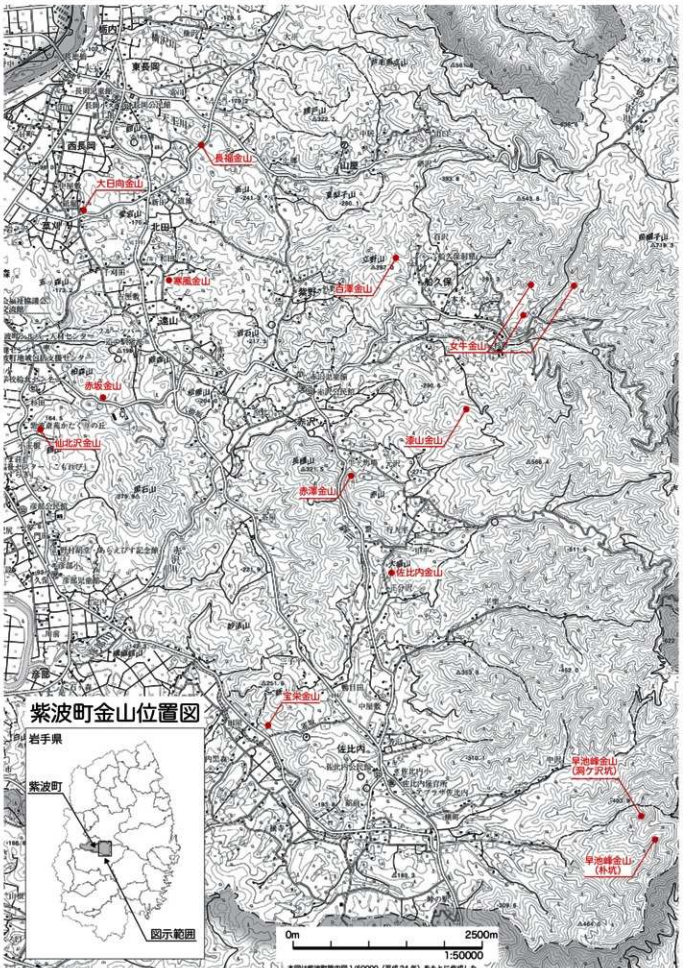
1　女牛金山元山鉱床の自然金

2　百澤金山竹村鉱業事務所印（紫波町教育委員会蔵）



3　金鉱試掘願添付地図（女牛金山）明治 26 年（1893）

4　女牛金山の山神碑（昭和 12 年（1937）銘）


長福金山
大日向金山
寒風金山
吉澤金山
女牛金山
赤坂金山
仙北沢金山
赤澤金山
佐比内金山
宝栄金山
早池峰金山
(黒ケ沢沢)
早池峰金山
(朴沢)
紫波町金山位置図
岩手県
紫波町
図示範囲
0m
2500m
1:50000
本図は紫波町管内図 1/50000（平成 24 年）をもとに作成した。

例　言

1　本書は、令和４年度に紫波町教育委員会が国庫補助金を得て実施した町内金鉱山遺跡分布調査の報告書である。掲載した写真は原則として令和４年度に撮影したものである。

2　本報告書の作成は紫波町教育委員会が実施し、執筆は蒲田理（紫波町文化財調査委員）が担当し、編集は教育部生涯学習課歴史文化係が担当した。令和４年度の職員体制は下記のとおりである。

教育長　佗美　淳	教育部長　八重嶋　靖	生涯学習課長　須川　範一
副課長　高橋　哲也	歴史文化係長　岩舘　岳	主任文化財専門員　鈴木　賢治

3　調査・編集にあたっては下記の方にご協力をいただいた。（敬称略）

兼平賢治、北村任、工藤睦夫、熊谷育子、高橋敬明、長澤聖浩、古澤友治

4　金試料の分析は地方独立行政法人岩手県工業技術センターに依頼した。

5　本調査に関する記録類は、紫波町教育委員会事務局において保管している。

6　引用文献や執筆にあたっての参考文献等は、一括して巻末に掲載した。

目　次

口　絵
例　言
目　次
1. はじめに …… 4
2. 紫波町の金鉱業史 …… 5
3. 紫波町の金鉱床 …… 7
3-1. 鉱脈鉱床
3-2. 漂砂鉱床
コラム「金を取り出す」
4. 紫波町の金山遺跡 …… 13
4-1. 大日向金山（西長岡字彼岸田）
4-2. 長福金山（東長岡字林崎）
4-3. 赤坂金山（星山字柏森）
4-4. 仙北沢金山（星山字杉田、大巻字花立）
4-5. 赤澤金山（赤沢字牛ケ馬場、赤沢字繁）
4-6. 漆山金山（赤沢字漆山、赤沢字御蔵山）
4-7. 寒風金山（遠山字上小深田、遠山字新坊）
4-8. 女牛金山（赤沢字女牛、船久保字一本木）
4-9. 百澤金山（船久保字百沢）
4-10. 佐比内金山（佐比内字正分沢）
4-11. 早池峰金山（佐比内字碇ケ崎）
4-12. 宝栄金山（佐比内字田屋）
参考資料
写真編…… 29
資料編…… 39

図表目次

図 1　佐州金銀採製全図
図 2　旧紫波郡内で最大級の青化精錬所跡
図 3　岩盤の裂罅を充填した含金石英脈（女牛金山蓬来鉱床）
図 4　重膜構造を呈する金鉱石（早池峰金山朴坑）
図 5　多量の自然金を伴う高品位鉱（早池峰金山朴坑）
図 6　網状細脈中の自然金（盛岡市上太田穴口）
図 7　母岩と並行に発達した銀黒（新潟県佐渡金山）
図 8　高品位鉱中の銀黒部分（同佐渡金山青盤脈）
図 9　鉱石を粉砕するボールミル（陸前高田市玉山金山）
図 10　微粉化前の金鉱石（早池峰金山朴坑）
図 11　大日向金山遺構分布状況
図 12　長福金山遺構分布状況
図 13　赤坂金山遺構分布状況
図 14　仙北沢金山遺構分布状況
図 15　赤澤金山遺構分布状況
図 16　漆山金山遺構分布状況
図 17　寒風金山遺構分布状況
図 18　女牛金山遺構分布状況
図 19　百澤金山遺構分布状況
図 20　佐比内金山遺構分布状況
図 21　早池峰金山遺構分布状況
図 22　宝栄金山遺構分布状況
図 23　小丘陵西端の旧坑跡
図 24　製錬所の基礎遺構
図 25　丘陵上の溝状採掘跡
図 26　金山地之神石碑
図 27　尾根南斜面の旧坑跡
図 28　小丘陵北斜面の溝状の採掘跡
図 29　三角山北斜面の旧坑跡
図 30　金が沢の赤沢金山山神石碑
図 31　製錬所の基礎遺構
図 32　牛ケ馬場地内の製錬用石挽き臼（下臼）
図 33　漆山金山採掘跡の最上部
図 34　寒風山北西斜面の旧坑跡
図 35　赤沢小学校遠山分校跡の台地
図 36　元山鉱床の立坑跡
図 37　元山鉱床のズリ山
図 38　元山鉱床のみよし掘り跡
図 39　蓬来鉱床の旧坑
図 40　第二女牛鉱床の旧坑跡
図 41　百澤金山竹村鉱業事務所辞令
図 42　大盛山西斜面の大切坑
図 43　大盛山南東斜面の竪坑
図 44　早池峰金山朴坑跡
図 45　朴木金山精錬所跡とされる平坦地
図 46　朴鉱山事務所
図 47　遊郭跡とされるテラス
図 48　宝栄金山旧坑跡
図 49　佐比内川沿いの製錬所の基礎遺構
図 50　試料 1（早池峰金山朴産）
図 51　試料 2（女牛金山元山鉱床産）
図 52　試料 3（赤沢川産砂金）
図 53　試料 4（南日詰小路口 1 遺跡出土土器）
図 54　金山証文（1）（寛永 15 年（1638））
図 55　金山証文（2）（寛永 15 年（1638））
図 56　金山証文（3）（寛永 15 年（1638））
図 57　金山証文（4）（寛永 16 年（1639））
図 58　金山証文（5）（寛永 16 年（1639））
図 59　金山証文（6）（寛永 15 年（1638））
図 60　金山証文（7）（慶安 3 年（1650））
図 61　金山証文（8）（承応 4 年（明暦元年）（1655））
図 62　金山証文（9）（万治元年（1658））
図 63　金山証文（10）（万治 2 年（1659））
図 64　金山証文（11）（万治 3 年（1660））
表 1　文献・伝承中の町内金採掘地一覧
表 2　金試料分析結果一覧

1. はじめに

金（Gold）は元素記号 Au、原子番号 79 の第 11 族に属する貴金属元素である。他の単体金属には見られない黄金色の輝きを有し、少ない存在量と反応性の低さから多くの時代・地域で装飾品や貨幣の材料に用いられてきたが、現在では優れた導電性などから様々な電気製品に欠かせない工業金属として利用が急増している。金は酸化物として産する鉄や硫化物として産する銅と違い、多くが製錬の必要がない単体として自然界に存在するため人類が最初に得た単体金属のひとつと考えられ、大航海時代には金を求める探検が新航路を開拓し国際交流を飛躍的に発展させたが、ときには豊富な金を埋蔵する新産地を狙う侵略戦争をも引き起こした。また、希少な金を人工的に生み出そうとする錬金術はついに金をつくることができなかったが、失敗の中から数多の化学的発見があり科学技術の発展に大いに貢献した。

我が国は大航海時代に黄金の国ジパングと同一視され西洋列強が押し寄せたが、この時代には甲斐の武田氏や常陸の佐竹氏、陸奥の南部氏や伊達氏らが領内の金山を開発して強勢を誇ったほか、天下を統一した豊臣秀吉は全国の有力金山の直轄化を進めて莫大な黄金を手中に収め、巨大な金貨である天正大判を鋳造させた。近世初期には新潟県の佐渡金山や静岡県の土肥金山などの大規模鉱床の発見により世界有数の金輸出国となったが、その後は生産が鈍化し現在国内で稼行されている金山は鹿児島県の菱刈鉱山のみとなり、国内消費量のほとんどを海外からの輸入に頼らざるを得なくなっている。廃山になった金山は一部を除いてほとんどが打ち捨てられているが、平成 19 年（2007）の島根県石見銀山の世界文化遺産登録に続き佐渡金山が世界文化遺産への登録を目指すなど、近年になって金・銀の採掘遺構や関連する鉱山町の保存と調査・研究が各地で行われるようになりつつある。岩手県では平成 23 年（2011）に平泉の文化遺産が世界文化遺産に登録されたことで、平泉藤原氏の黄金文化を支えた金への注目も高まりつつあるが、小規模な金山が広範囲に点在する北上山地ではその調査・研究は困難を極めている。藤原氏は初代となる藤原清衡が出羽清原氏から奥六郡を含む陸奥・出羽両国の広大な地域を受け継ぎ、以来 2 代基衡、3 代秀衡、4 代泰衡と約 90 年に渡って両国を支配したが、岩手県内の多くの産金地がその発見時期を藤原氏時代に求めていることからもわかるように、岩手県の金鉱業史において最も重要な時代のひとつである。前九年合戦以来東北地方で長く続いた戦乱が終息したことで社会が安定し、経済活動が活発化したことで大勢の金商人や金採掘者らが集まり産金量の急増につながったものと思われ、内外を金箔で覆い随所に螺鈿や象牙を施した中尊寺金色堂が当時

図 1　佐州金銀採製全図（江戸時代 嘉永 6 年（1853）写）出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）

の莫大な産金量を物語っている。

岩手県の中央部に位置する紫波町は、北上山地と奥羽脊梁山地の両山地にかけて多数の金鉱床が胚胎し、近世初期に豊富な産金で富裕さを謳われた盛岡藩を代表する産金地であったことからも、藤原氏時代には気仙地方とともに県内を代表する産金地だったことは疑いようがない。町内には長岡地区に大日向・大平・長福、彦部地区に赤坂・仙北沢、赤沢地区に赤澤・漆山・元澤・薦穂・寒風・仙北壇・繋・船久保・女牛・百澤・矢柄、佐比内地区に大盛・釜ケ沢・雀坂・僧ケ沢・増ケ沢・洞ケ沢・平栗・朴木、志和地区に潟安・山王海・須賀倉などの金山の名前が知られ、この他にも実在を確認できない金山や試掘地と称する場所が無数に存在する。しかし、採掘遺構である砂金の堀場や露天掘り、坑内掘り跡のほか生産遺構の製錬所などの多くは人里離れた山地にあることが多く、稼行された当時を知る人が減少した今ではその位置や範囲を知ることは極めて難しい。また、生活圏から離れた山地においても、過去に農地として利用するために造成が行われたり、林道開設や治山工事によって地形の改変を受ける場合があり、さらに土砂崩れや沢の浸食などの自然的な要因も重なり知られずに消滅の危機にさらされている遺構は多い。平泉藤原氏の時代から近代にいたるまで地域の歴史や文化・芸能の発展に多大な影響を与え続けた金鉱業の実態を解き明かし後世に継承していくために、今まさに失われようとしているこれらの遺構の現状を記録することは現在に生きる我々の重要な責務である。本報告では文献史料や地域住民からの聞き取りによって所在地を把握できた町内の各金山を踏査し、確認できた遺構の分布状況を記録するとともに若干の考察を加えた。

2. 紫波町の金鉱業史

紫波町における金採掘の始期については、これを示す確実な史料はなく不詳というよりほかはない。あくまで推測の域を出ないが、天平21年（749）の陸奥国小田郡での我が国初の産金以降、多賀以北の陸奥国では調庸として金を納めさせるようになる（『続日本紀』）ことから、砂金採掘の技術を持った集団が陸奥国の北進に合わせて徐々に北上し、斯波（志波・志和・紫波）郡にも弘仁2年（811）の郡設置に合わせて来住し採掘を始めたように思われる。いずれにせよ平泉藤原氏の時代すでに重要な砂金産地となっていたことは疑いようが無く、藤原清衡の四男・亘十郎清綱を祖とする比爪藤原氏が比爪館（南日詰字箱清水）に配された理由をこの砂金産地の掌握に求める説もある。北上川東部の山屋地区に伝承される山屋の田植踊は、藤原氏時代に砂金採掘のため来住した孫六なる者が持ち込んだ田楽や田舞を、地元の豪族が里人に伝承を受けさせたことにはじまると伝わるが、同地区を流れる天王川の源流域は女牛金山竪金鉱床（赤沢字女牛）に近接し、また中流域には近代まで稼行された長福金山（東長岡字林崎）もあり、当時これらの鉱床に由来する砂金が採掘されていた可能性がある。また、近代まで砂金が採掘された赤沢川沿いでは、荒屋敷工藤家、義経神社大角家がともに藤原氏時代の砂金採掘に関連して来住したという家伝を有している。北上川西部では新山神社（土館字浦田）が山王海の産金鎮護の社として藤原氏の崇敬を受けていたとされ、滝名川砂金の主要な採掘地が源流域の山王海にまで達していたことを物語っている。文治5年（1189）、奥州合戦により平泉藤原氏は滅亡したが、一族の比爪藤原氏は清綱の子・俊衡が本領を安堵された。しかし、岩手郡から斯波郡にかけての北上川東部は河村氏、南接する稗貫郡は中条氏（稗貫氏）といった鎌倉御家人に新たに与えられ、俊衡が安堵されたであろう斯波郡の北上川西部も後に足利氏へ与えられた。これ以降、中世後期に至るまで金採掘の伝承等は全く残されておらず、「陸奥貢金追年減少（『玉葉』文治3年（1187）9月29日条）」の記述の通り、長期の乱掘により藤原氏の滅亡以前から砂金の産出量が減少し、鎌倉御家人の来住した時にはすでに往時の華々しさを失っていたように思われる。

中世後期には高水寺城（二日町字古舘）を拠点とした足利一門筆頭の家格とされる斯波氏が、現在

の紫波郡及び周辺を支配したが、北上川東部には産金地を掌握した大萱生氏、長岡氏といった大身の家臣がおり、領内の一元的な支配への障害となっていた。斯波氏と強い繋がりを有した稗貫氏は天文24年（1555）に上洛するとともに足利将軍へ黄金10両を献上したが、同氏も斯波氏と同様に領内の支配は盤石ではなかった。特に稗貫川流域の産金地を掌握して強勢を誇る大迫氏は主家稗貫氏に従わず、主家の発した討伐軍を破るほどであった。彼ら産金地を抱える領主にとって金山はその軍事行動を支える重要な財源であり、赤澤金山（赤沢字牛ケ馬場）における赤沢館のような金山に隣接する中世城館の存在からも、当時の産金地の緊張の高さを窺い知れる。これらの城館に拠った小館主は甲斐武田氏における金山衆のように、在地武士でありながら金山を管理する山師的性格も帯びていたのではないだろうか。天正年間（1573-1592）に女牛金山を稼行したという及川氏は長岡氏の家臣と伝わり、まさに金山を管理しながら長岡氏に仕えた者の一人であったように思われるが、同じく産金地として知られる遠野市小友町にも葛西氏旧臣の及川氏がおり、両氏は同族でともに金山開発のノウハウを持っていた可能性がある。中世後期は金探掘が旧来の砂金採掘から金山開発へ発展した重要な時期であったと推定されるが、これを知ることの出来る史料は極めて少ないのが現状である。

天正16年（1588）、斯波詮直は反乱を起こした家臣に討伐軍を出したが、領内の混乱を突いて南部信直が斯波領内へ侵攻し斯波氏家臣の多くを味方に付けたため、詮直は敗走を余儀なくされここに高水寺斯波氏は滅亡した。その後、当地は南部氏の領するところとなった。斯波氏敗北から間もない慶長7年（1602）には僧ケ沢金山が開発されていることから（『紫波町史』第一巻）、当時における金山開発の重要性がうかがい知れる。この僧ケ沢金山については紫波町の僧ケ沢金山（佐比内字中沢）と遠野市小友町の僧ケ沢金山の二説があり、慶長年間の開発がどちらを指すのかは諸説あり定まっていない。

近世初期には紫波町各地で活発な金山開発が行われ、盛岡藩財政の重要な部分を占めるようになっていたが、この頃を代表する金山に朴木金山（後の早池峰金山，佐比内字砥ケ崎）がある。朴木は厚朴、朴とも記され、元和8年（1622）に金山師・丹波弥十郎が江戸にて運上金を競合い大判6,500枚で請け負ったとされる伝説的な金山で、最盛期の金山人口は約1万人に達して角力や歌舞伎の興行もあり、「奥州五十四郡・出羽十二郡に懸る名所有間じきと皆々申来る（『厚朴木金山覚書状』）」ほどの有力金山へと成長した。金山の発見を受けて盛岡藩では志和東根金山奉行を任命し、藩が直接金山を支配する「直山」と、山師に一定期間金山の管理を任せ運上金を上納させる「請山」という二つの方法をとってこれを管理した。

図2　旧紫波郡内で最大級の青化精錬所跡（盛岡市大萱生金山）

北上川西部では近世期再び滝名川流域で砂金採掘が行われたようである。岩手山神社（犬渕字西田）は滝名川の砂金採掘が盛んだった南部利雄の時代に産金鎮護のために建立されたとされ、近江商人の村井権兵衛もこの地域の産金景気を狙って志和に来住したという説がある。滝名川の上流にあたる八戸藩志和通では延宝２年（1674）に銀が見つかり（『紫波町史』第１巻）、同藩の産金地であった久慈通から詳しい者を送って採掘を行い、山銀の献上もあったがその後発展した様子はない。この頃、郡山駅（紫波町日詰）は宿場として栄え多くの商人が集まっていた。当地を代表する豪商・美濃屋金子家が松倉金山（花巻市湯口）を稼行したほか、同じく日詰の伊勢屋平井家が近代に綱取鉱山（北上市和賀町）を経営している。

近代に入ると採掘の機械化や製錬技術の向上によって再び多くの金山が開発されるようになったが、そのほとんどは近世に採掘された金山の再開発で、採掘が容易な富鉱はことごとく掘り取られているのが普通であった。明治 20 年（1887）には百澤金山（船久保字百沢）が再開発されたものの、すでに稼行に耐えない状態であったようでわずか６か月で中止され、その後の所有者も短期間で放棄している。多くの金山が良鉱を発見できないまま放棄されるなか、女牛金山では明治 24 年（1891）頃から幾多の所有者による試掘が試みられ、昭和初期に富鉱部に着脈してからは順調に採掘が続けられた。昭和 18 年（1943）、太平洋戦争の激化に伴い国は戦略上重要な資源の採掘に注力するため、金鉱山整備令を発布して一部を除く金山の稼行を停止させた。紫波町では長福金山や佐比内金山（佐比内字正分沢）が整理の対象となる中で、女牛金山は戦略上重要なタングステンの採掘に切り替えて稼行を続けた。整理の対象となった金山は設備の供出や排水の停止等で戦後の再開が難しくなりそのまま廃山となるものが多かったが、整備令を生き抜いた女牛金山も鉱量の減少や採掘にかかる費用の増加に悩まされ、昭和 30 年代には休山となり同 49 年（1974）廃山を迎えた。

3. 紫波町の金鉱床

紫波町は北上川流域に開けた北上低地帯を境として、東部には古生代オルドビス紀の超塩基性岩類を基盤に浅海成の中－古生層が厚く発達する準平原の北上山地が広がり、また各所に前期白亜紀の花崗岩類小岩体が露出している。一方、西部には古生層や前期白亜紀花崗岩類を基盤として新第三紀中新世－第四紀更新世の火山岩や火山砕屑岩、湖成層等が分布する急峻な奥羽脊梁山地が聳える。金鉱床は北上山地、奥羽脊梁山地の双方に分布するが主力は北上山地のものである。

図３　岩盤の裂罅を充填した含金石英脈（女牛金山蓬来鉱床）

3-1. 鉱脈鉱床

北上山地の金鉱床は前期白亜紀花崗岩類に関連する中－高温熱水性含金石英脈からなるが、花崗岩類は町内では山屋字中居や佐比内字内黒森に小規模な露出を見るにすぎない。鉱床は超塩基性岩類中に胚胎するものがわずかに知られるほかは、浅海成の中－古生層中に胚胎している。女牛・早池峰の金鉱床にはしばしば灰重石の濃集が認められ、特に前者は太平洋戦争中にこの灰重石をタングステン鉱として採掘したが、それ以外の鉱床は他の鉱石鉱物をほとんど随伴しない単純金鉱床である。鉱脈の走向延長は数十ｍほどで断続し、脈幅も数 cm から１ｍ程度に膨縮を繰り返し品位もわずかな距離で大きく上下する。脈中には硫砒鉄鉱や黄鉄鉱を主とする硫化鉱物やその酸化で生じた褐鉄鉱を多量に含む部分があり、このような部分は総じて金品位が高い。自然金はこれらの硫化鉱物と褐鉄鉱に随伴して肉眼鉱の所謂トジ金として産するほか、母岩の薄層を挟んで重膜構造を呈した部分ではその母岩近く（盤際）からも多産する。上部酸化帯では地表付近に露出した初生の含金石英脈が風化変質を受け、軟弱化するとともに自然金が分離し所謂柴金として土壌中に残留しており、近世初期にみよし（実吉）掘りと称して盛大に行われた開発は主としてこれを採掘対象とした。

図４　重膜構造を呈する金鉱石（早池峰金山朴坑）

図５　多量の自然金を伴う高品位鉱（早池峰金山朴坑）

図6　網状細脈中の自然金（盛岡市上太田穴口）

奥羽脊梁山地の金鉱床は新第三紀中新世－鮮新世のデイサイト・流紋岩等の貫入岩近傍に発達した低温熱水性（浅熱水性）含金銀石英脈からなり、しばしば多量の銅・鉛・亜鉛を随伴し、自然金は銀を固溶したエレクトラムとして産することが普通である。滝名川上流のカタノヤス（湯安）沢沿いでは須賀倉金山をはじめ複数の金山が稼行されたと伝わり、実際に沢の転石中に脈石英が多く見受けられるものの採掘跡は確認できていない。かつて金が試掘されたという盛岡市上太田穴口の宰郷山北麓には中新世の軽石凝灰岩とこれを貫く流紋岩岩脈があり、最近までその凝灰岩中に胚胎する含金銀石英脈が観察できた。この含金銀石英脈は脈幅 1 － 3cm程度で一部は網状細脈となり、脈の会合部や肥大部の小晶洞中に多量の褐鉄鉱とともに自然金が肉眼鉱として存在した。また閃亜鉛鉱・方鉛鉱・黄鉄鉱や稀に黄銅鉱を伴う石英脈も随所に胚胎しており一部は雫石川河床に露出しているが、これらの金・鉛・亜鉛を含む鉱脈は一様に小規模で稼行に耐えない。花巻市湯口には松倉金山があり、中新世の凝灰岩－凝灰質シルト岩中に胚胎する含金銀石英脈を採掘した。この含金銀石英脈は晶洞の発達した脈幅 1cm前後の網状細脈からなり自然金はこの晶洞中に褐鉄鉱を伴って肉眼鉱として産したが、規

図7　母岩と並行に発達した銀黒（新潟県佐渡金山）

図 8　高品位鉱中の銀黒部分（同佐渡金山青盤脈）

模が小さく少人数で断続的に稼行されたにすぎない。紫波町の奥羽脊梁山地で稼行された金山も上記の穴口、松倉両金山と同様の含金銀石英脈を採掘したものと推定されるが、やはり規模の小さなものであったと思われる。また、鷲之巣金山（西和賀町）に代表される含金銅鉱床は奥羽脊梁山地の金鉱床としては規模の大きなものであるが、紫波町内に同様の鉱床は認められていない。

前述の佐渡金山や土肥金山、菱刈金山といった日本を代表する大規模金銀鉱床は、低温熱水性（浅熱水性）含金銀石英－氷長石脈を採掘したもので、鉱脈の走向延長は 2,000m 以上、脈幅も 10m 以上に達することがあり鉱量は莫大である。鉱石は乳白色緻密な石英－氷長石を主体として縞状構造が顕著に発達し、その中に針銀鉱や紅銀鉱等の銀鉱物が濃集した銀黒と呼ばれる黒－灰色のバンドを伴うが、金はこの銀黒中に多量の銀を固溶した微細なエレクトラムとして含まれ、北上山地の金鉱床のような肉眼金を産することは滅多にない。

3-2. 漂砂鉱床

漂砂鉱床は北上山地に端を発する天王川、赤川、赤沢川、佐比内川流域のものが古くから有名であるが、奥羽脊梁山地に端を発する滝名川でも規模は劣るものの各所で採掘が行われた。漂砂鉱床は初生の金鉱脈が風化浸食を受けることで耐食性のある自然金が分離して、これが砂金として河川を流下し、随伴する石英や固溶している銀が除かれながら河床や旧河道に濃集堆積したもので、採掘が容易で製錬の必要もないことから初期産金の主体をなした。また、金山沢や金堀沢と称する場所の多くがかつて砂金を産出した所と伝わるが、実際には砂鉄の堀場が誤伝されている場合がほとんどである。

地区	掲載	金山名称	所在地大字	沿革
長岡	○	大日向	西長岡	
		大平	東長岡	近代以降に短期間稼行.
	○	長福	東長岡	
彦部		赤川	星山	砂金，紫波郡赤石村郷土教育資料記載.
	○	赤坂	星山	
	○	仙北沢	星山，彦部	
		幕張	星山	仙北沢金山と同一か.
赤沢	○	赤澤	赤沢	
		赤沢川	赤沢	砂金，明治 18 年（1885）工藤真八郎氏ら採掘.
		赤沢中	赤沢	慶安 3 年（1650）開発.
		牛ケ森	船久保	女牛金山より鉱区分離.
	○	漆山	赤沢	
		金牛	赤沢	昭和期に含マンガン鉄鉱採掘. 金鉱試掘か.
		金堀沢	山屋	金採掘伝承地. 砂鉄掘場か.
		ｷﾘｼﾀ沢	山屋	金採掘伝承地. 砂鉄掘場か.
		元澤	赤沢	享保 5 年（1720）開発.
		鷹槌	赤沢	明治期に試掘申請.
	○	寒風	遠山	
		仙北壇	赤沢	詳細不明.
		長栄	赤沢・佐比内	近代以降に短期間稼行.
		繁	赤沢	寛永 15 年（1638）開発.
		繁川	赤沢	砂金，明治 18 年（1885）工藤真八郎氏ら採掘.
		遠山	遠山	後の寒風金山と同一か.
		八枚	山屋	山屋田植踊由来に見える. 砂金掘場か.
		船久保	船久保	寛永 16 年（1639）開発，後の女牛金山と同一か.
		向井川	赤沢	砂金，明治 18 年（1885）工藤真八郎氏ら採掘.
	○	女牛	船久保，赤沢	
	○	百澤	船久保	
		矢柄	赤沢・佐比内	後の長栄金山.
佐比内		朝日	佐比内	近代以降に稼行，後に白珪石鉱山.
		小豆坂	佐比内	金採掘伝承地.
		内黒森	佐比内	詳細不明.
		大橋	佐比内・大迫町亀ケ森	近代以降に短期間稼行.
		大盛	佐比内	後の佐比内金山.
		釜ケ沢	佐比内	万治 2 年（1659）開発，後の宝栄金山と同一か.
		五枚平	佐比内	朴木金山.
		香番	佐比内	延宝 3 年（1675）開発，朴木金山.
	○	佐比内	佐比内	
		雀坂	佐比内	後の宝栄金山.
		増ケ沢	佐比内	近代以降に短期間稼行.
		僧ケ沢	佐比内	慶長 7 年（1602）開発.
		洞ケ沢	佐比内	後の早池峰金山洞ケ沢鉱床.
		砥ケ崎	佐比内	砂金，明治 18 年（1885）北村編當氏採掘.
		中屋敷	佐比内	近代以降に稼行，後に白珪石鉱山.
	○	早池峰	佐比内	
		平栗	佐比内	正保 3 年（1646）開発，詳細不明.
	○	宝栄	佐比内	
		朴木	佐比内	六千枚平，後の早池峰金山朴鉱床.
		朴大岩	佐比内	明暦元年開発，朴木金山.
		横町	佐比内	砂金，明治 18 年（1885）北村編當氏採掘.
志和		砂子沢	土館	砂金.
		潟ノ安	土館	詳細不明.
		川原	上平沢	砂金，紫波郡赤石村郷土教育資料記載.
		金山沢	土館	金採掘伝承地. 砂鉄掘場か.
		山王海	土館	詳細不明.
		須賀倉	土館	詳細不明.
水分		升沢	升沢	砂金，紫波郡赤石村郷土教育資料記載.
赤石		越田	犬渕	砂金，紫波郡赤石村郷土教育資料記載.
		京田	南日詰	砂金，紫波郡赤石村郷土教育資料記載.
		佐藤部	南日詰	砂金，紫波郡赤石村郷土教育資料記載.

表 1　文献・伝承中の町内金採掘地一覧

コラム「金を取り出す」

採掘された金鉱石から単体の金を取り出すためには製錬を行う必要がある。新潟県佐渡金山に代表される銀黒鉱を採掘する金山では、鉱石を粉砕して集めた微細な自然金を灰吹法により回収し、さらに多量に伴う銀を分離する作業を繰り返し行い金の純度を高め製品とした。北上山地の金山から採掘される金鉱石は、あまり銀を伴わない粗粒の自然金を含むもので前者に比べ製錬は比較的容易であった。

近世の金山では玄能・たがねを用いた手掘りのため採掘作業は過酷で、できるだけ金を含む部分のみを効率的に掘り取るために、坑道は最小限の高さ・幅で鉱脈を追いかけた。また、固い岩盤に対しては、掘場で火を焚いて加熱した後に急冷し鉱石を脆くする焼切を行うなど、少しでも採掘しやすいように工夫がなされた。大変な苦労の末に採掘された鉱石は粗く砕いた上で石挽き臼にかけて微粉化し、比重選鉱に送られる（粉成作業）。比重選鉱ではゆり盆もしくはゆり板、せり板やねこだ等の道具で鉱石粉から自然金のみを分離し（ゆり分け・からめ作業）、回収された自然金は不純物を取り除く精錬作業を経て製品に加工された。危険を伴う重労働の坑内作業は男性が担う一方、金の回収に繊細な技術を求められる粉成・ゆり分け・からめ作業では主として女性が活躍していたようである。

明治維新後の近代化は金山の採掘・製錬にも大きな進歩をもたらし、坑内での採掘・排水・換気の機械化により採掘量が急増した。鉱石の粉砕も搗鉱機やボールミルの導入で大量に処理ができるようになり、製錬にはシアン化合物で鉱石から金を浸出する青化法が導入され、今までは捨てられていたような低品位鉱からも金の回収が可能となった。しかし、採掘された鉱石から金を含む部分と不要な石を分ける選鉱作業は依然として手作業（手選）が主体で、給料が高いことから中学卒業後の地元の若い女性から働き口として人気があったという。

図 9　ボールミル（陸前高田市玉山金山）

図 10　微粉化前の金鉱石（早池峰金山朴坑）

金鉱山遺跡詳細分布調査

長岡地区
　大日向金山（西長岡字彼岸田）
　長福金山（東長岡字林崎）
彦部地区
　赤坂金山（星山字柏森）
　仙北沢金山（星山字杉田、大巻字花立）
赤沢地区
　赤澤金山（赤沢字牛ケ馬場、赤沢字繋）
　漆山金山（赤沢字漆山、赤沢字御蔵山）
　寒風金山（遠山字上小深田、遠山字新坊）
　女牛金山（赤沢字女牛、船久保字一本木）
　百澤金山（船久保字百沢）
佐比内地区
　佐比内金山（佐比内字正分沢）
　早池峰金山（佐比内字砥ケ崎）
　宝栄金山（佐比内字田屋）

4. 紫波町の金山遺跡

長岡地区（紫波町西長岡、東長岡）

4-1. 大日向金山（西長岡字彼岸田）

位置・名称

愛宕山（175.7 m）の北西約 600 m付近に旧坑跡及び関連遺構がある。名称については古来砥堀金山と称して稼行されたという伝承がある。

沿革

開山時期を示す史料や伝承は無い。享和３年（1803）の『御領分中本村枝村付並位付』に草刈村の枝村として金山二軒があり、これを本金山に関連したものとする説がある（『紫波町史』第一巻）。下って昭和 10 年（1935）に山形県の西沢定吉氏が鉱区を設定し、その後従業員 50 名で月 40t を出鉱したが、同 14 年（1939）に秋田大助氏らに経営が移ると品位低下により同 16 年（1941）に休山となった（『紫波町地下資源調査報告書』）。

地質

鉱床は下部白亜系山屋層の灰白色流紋岩中に胚胎した熱水性含金石英脈である。鉱石は乳白色緻密な石英からなり、よく母岩の角礫を取り込み、裂罅に沿って二次的な二酸化マンガンが沈殿している。一部に褐鉄鉱を多量に伴う部分があり、このようなものは高品位であったという。

遺構

小丘陵の西端に旧坑跡が残存するほか、その周辺には坑道の落盤によるものと推定される大小多数のくぼ地がおおよそ南北方向に連続するが、主脈が南北方向へ延長したという記録（『紫波町地下資源調査報告書』）と調和的である。旧坑周辺の平坦地には製錬所のコンクリート製基礎部分がある。本金山は山地と平野部の境界付近に位置するため、関連遺構には住宅や農地が近接し、ズリに至っては道路開設によってかなりの部分が失われたようである。本金山の北東約 900m にある国道 396 号線北田十文字付近では以前、地表が陥没し地下の坑道が姿を現したというが、これは新第三紀層中の亜炭（褐炭）を採掘したものである。

図 11 大日向金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

4-2. 長福金山（東長岡字林崎）

位置・名称

館山（163.3m）の東約 1km 付近の丘陵上に旧坑跡があり、金山の北端には天王川が西流する。近代以前には林崎金山と称して稼行されたという。

沿革

本金山の近代以前に関する史料や伝承等は全く残されておらず、近代以降の沿革についても断片的な記録が残されているのみである。昭和初期に南西斜面の立坑を中心に稼行されていたが、昭和 18 年（1943）の金山整備令の対象となり休山している（『新岩手県鉱山誌』）。戦後に再開し短期間作業が続けられていたとする証言があるが、採掘が行われていたか否かは不明である。

地質

鉱床は下部白亜系山屋層の凝灰岩中に胚胎した熱水性含金石英脈である。鉱石は乳白色緻密で場所によっては多少の褐鉄鉱を伴うものがある。

遺構

丘陵の広い範囲に小規模な採掘跡が点在するが、なかでも立坑跡がある南東斜面が採掘の中心であったものと思われる。また丘陵の頂部付近に製錬所が存在したとされるが、道路の開設により地山が大きく削られた現在では全く痕跡を留めていない。丘陵の北斜面には「□□七□ 金山地之神 二月十□□」と刻まれた石碑があるが、この石碑はかつて山屋字鍋沢地内にあったという金山に関連するもので、所有者の山田氏が同鍋沢から現在地に転居するに伴い移転したものという。

図 12　長福金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

彦部地区（紫波町大巻、星山）

4-3. 赤坂金山（星山字柏森）

位置・名称

柏森山（186m）の南東約 400m の尾根南斜面に旧坑跡とされる遺構がある。

沿革

本金山の沿革に関する史料は皆無で、現時点では金山であったか否かもはっきりしない。しかし明治時代に秋田県の人が金を目的に稼行し、まもなく放棄されたとする証言があり、後述する仙北沢金山に近接する場所として金の試掘が行われた可能性がある。

地質

周辺にはオルドビス系の超塩基性岩類が広く分布し、旧坑跡の付近にも蛇紋岩の露頭が点在する。鉱床については鉱石を確認できず詳細はまったく不明である。

遺構

尾根の南斜面に旧坑跡とされる南北に延びた溝状のくぼ地があり、その前面にはテラス状の地形が残存するが、大部分は道路開設によってすでに破壊されている。旧坑跡の西約 400m には道路に面して蛇紋岩の大露頭が見られるが、これは一時期地元民が温石として蛇紋岩を採掘した跡という。

図 13 赤坂金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

4－4．仙北沢金山（星山字杉田、大巻字花立）

位置・名称

柏森山（186m）の南西約 500m の小丘陵北斜面に採掘跡がある。また、採掘跡のさらに南西約 500m 大巻字花立付近の丘陵（164m）南斜面にも脈石英の散布地がある。

沿革

開山時期は不明ながら近代以前すでに稼行されたものと思われ、金山に隣接する高金寺（大巻字花立）は金山の繁栄により興金庵と称し、後に高金寺に改めたとされる。大正 4 年（1915）に田畑勇太郎氏単独で彦部に金の採掘願があり、翌 5 年（1916）には田畑勇太郎氏、作山久次郎氏、阿部久兵衛氏の 3 氏が星山・杉田・花立にかけて金の採掘願を出しているが（『紫波町史』第 2 巻）、そのうち作山氏は明治 42 年（1909）、田畑氏は大正 14 年（1925）から彦部村長を務めている。田畑氏らの試みの結果は記録に残されていないが、試掘のみで放棄されたようである。

地質

周辺にはオルドビス系の超塩基性岩類が広く分布し採掘跡の付近にも風化した蛇紋岩の転石が散在するが、鉱床はこの蛇紋岩中に胚胎する熱水性含金石英脈である。鉱石は乳白色緻密な石英からなり、よく母岩の角礫を取り込み晶洞が発達するが、概して褐鉄鉱の汚染に乏しい。

遺構

小丘陵の北斜面に採掘跡と推定される溝状のくぼ地が多数残存し、みよし掘りの跡と考えられる。脈石英の転石は小丘陵の山頂付近でも確認できるため、この採掘跡はさらに上位にまで連続したものと思われるが、小丘陵の全体に開設された林道の整備によってすでに失われた可能性が高い。かつては 2、3 の坑口も残されていたというが、これらも現在では確認できない。

図 14　仙北沢金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

赤沢地区（紫波町赤沢、遠山、船久保、紫野）

4-5. 赤澤金山（赤沢字牛ケ馬場、赤沢字繁）

位置・名称

赤山（310m）から北西に延びる三角山と呼ばれる尾根の周辺に旧坑跡および関連遺構がある。一帯には本金山と近接して繁金山、元澤金山、薦鎚金山などが存在したと伝わる。

沿革

開山時期は不明であるが、事務所跡一帯に多数の製錬用石捲き白が残存することから近代以前にはすでに稼行されていたようである。近代以降については明治時代から小規模に稼行されていたことが知られる程度だが、後述する赤沢金山山神石碑や製錬所の基礎から見て昭和初期までは稼行していたことが分かる。稼行者についても伝わらないが、「木村鉱業部 赤澤鉱山事務所」と墨書された年代不明の木製看板が赤沢郷土資料館に所蔵されている。

地質

鉱床は下部白亜系山屋層の粘板岩中に発達した熱水性含金石英脈であり、多量の褐鉄鉱を伴うほかは他の鉱物をほとんど含まない。鉱石中に見られる褐鉄鉱は稀に黄鉄鉱仮晶の六面体をなす武石として産する。また、石英脈の一部には晶洞の発達する場所があり、ここから無色透明な水晶を産出することが周辺住民に知られていた。本鉱床一帯は繁、元澤、薦槌のほか、後述する佐比内（佐比内字正分沢）、増ケ沢等の金山が集中するが、周辺に鉱化に関連する花崗岩類の露出は確認できず地下浅部に潜在しているものと推定される。

遺構

三角山北斜面の旧坑跡は崩壊が進み溝状のくぼ地となっている。この旧坑跡から下位に向かってズリが展開し、さらにその下位に複数段のテラスも確認できるが下段ほど後世の改変を受けている。また、小くぼ地が旧坑跡から三角山の頂上付近に至る南北方向に連続しているが、この小くぼ地が坑道の落盤によるものか近世のみよし掘り跡かについては遺存が悪く不明である。三角山の東側には金が沢と呼ばれる沢が北流しているが、この沢沿いにかつて複数の坑口が存在し一部には木枠も残されていたという話があり、沢の出口付近の微高地には「昭和十五年十二月□日 山神 赤沢金山」と刻まれた石碑も存在することから、金が沢が近代以降の稼行の中心であったものと思われる。牛ケ馬場に残る製錬所の基礎は同時代に稼行された大日向金山と同様のもので、鉄製のボルトが埋め込まれたコンクリートの土台が残されている。三角山の南西には女郎沢と称される場所があり本金山に関連する地名と思われるが、踏査では遺構の類は確認できなかった。

図15 赤澤金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

4-6. 漆山金山（赤沢字漆山、赤沢字御蔵山）

位置・名称

赤沢字漆山の南約 1㎞の山地（360m）南斜面に採掘跡が存在する。花巻市大迫町にも同名の金山があることから、別に御蔵山金山とも呼ばれる。

沿革

開山時期や稼行期間を知ることのできる史料や伝承の類は残されていないが、丘陵の中腹に見られるみよし掘りの跡から近世初期にはすでに稼行されたものと推定される。赤沢字漆山の集落には製錬用の石挽き臼も散在している。

地質

鉱床は下部白亜系山屋層の粘板岩中に発達した熱水性含金石英脈である。鉱石は乳白色緻密な石英からなり、稀に黄鉄鉱仮晶の六面体をなす褐鉄鉱（武石）が濃集する部分がある。

遺構

山頂から中腹にかけてみよし掘りの跡が連続し、往時は盛大に稼行されたことを伺わせる。また、みよし掘り跡の溝の周囲には石英や母岩等の礫を積み上げたような形跡が見受けられる。

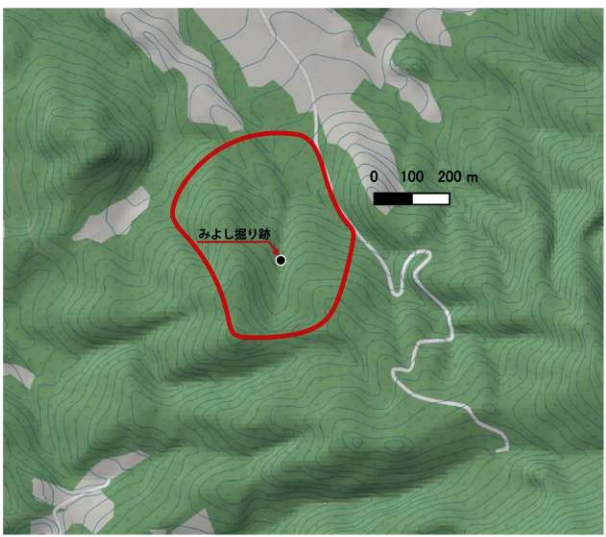


図 16　漆山金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

4-7. 寒風金山（遠山字上小深田、遠山字新坊）

位置・名称

寒風山（さむかぜやま）と呼ばれる丘陵（約 150m）の北西斜面に旧坑跡が残存する。古来、遠山金山と称して稼行された金山のひとつと思われる。

沿革

開山時期は不明ながら近代以前すでに稼行されていたものと推定される。安永 9 年（1780）の『邦内郷村志』に見える遠山新田には、遠山村 45 戸のうち 33 戸が集中したが文久年間（1861-1864）には 5 戸に急減しており、同地は金山の関係者が居住した場所という伝承もあることから、これを金山開発に関連した枝村とする説がある（『紫波町史』第一巻）。下って昭和初期に寒風金山と称して再開発が行われ、水平坑道及び立坑によって採掘を行ったとされる。また、かつて赤沢小学校遠山分校が置かれた遠山字新坊の舌状台地下においても同時期に金の試掘が行われたといわれており、現在台地上には金山の屋号が残る。

地質

鉱床は下部白亜系山屋層中に発達した熱水性含金石英脈を採掘したものと思われるが、付近は岩石の露出が少なく詳細は不明である。旧坑跡付近では以前花崗岩のコアストーンを掘り出して破砕し敷石として利用したとの証言があるが、現在は地表で花崗岩を確認することができない。

遺構

踏査では寒風山北西斜面にわずかに旧坑跡を確認するに留まったが、いまだ未調査の寒風山山中に採掘跡や遺構が残存する可能性がある。

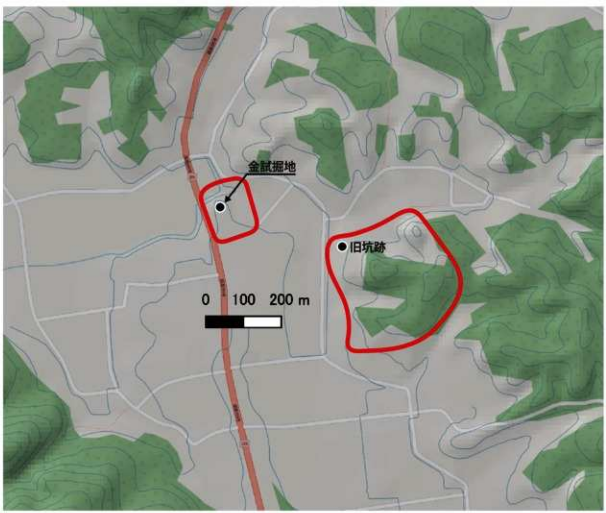


図 17　寒風金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

4-8. 女牛金山（赤沢字女牛、船久保字一本木）

位置・名称

船久保字杉町の北東約 500m に立坑跡と関連遺構（元山鉱床）があり、廃山時までの採掘の中心であった。また、立坑の北約 300m には旧坑（蓬来鉱床）、北東約 800m の赤沢字女牛にも旧坑跡（第二女牛鉱床）がある。第二女牛鉱床の北には竪金鉱床があったが遺構は確認できていない。

沿革

開山の時期は不明であるが、一説に天正年間（1573-1592）長岡城主の家臣及川氏らによって稼行されたという。また、寛永 16 年（1639）に開発された船久保金山（『紫波町史』第一巻）も本金山の元山鉱床や蓬来鉱床を指していた可能性がある。採掘は断続的に続けられたようで、延宝 5 年（1677）と享保 11 年（1726）の二度に渡って赤沢村荒屋敷助左衛門が旧坑の再開発を行っている（『紫波町史』第一巻）。船久保の杉町集落は本金山の金山町だったと伝わるほか、同じく船久保の十分一は採掘鉱石の計量地に由来するものとされている。また、第二女牛鉱床付近を流れる女牛沢支流の六十目沢、五両沢、金山沢等も本金山に関連した名称と思われ、この一帯が古くからの有力な金鉱地帯であったことを物語っている。

明治 24 年（1891）から同 26 年（1893）にかけて、荒廃していた本金山の第二女牛鉱床、竪金鉱床付近に対して赤沢村の工藤真八郎氏のほか、西和賀郡湯田村の高橋由蔵氏、盛岡市八幡町の菊池安蔵氏らが試掘申請を行っている（荒屋敷工藤家文書）。その後は所有者が二転三転したが、昭和 7 年（1932）に取得した長谷川広蔵氏の時代に富鉱部が発見され地域を代表する金山へと発展した。昭和 18 年（1943）の金山整備令の発布により戦時中は鉱種をタングステンに変更して採掘を続けたが、戦争の終結とともに再び金の採掘に戻り、数代の所有者を経て松尾鉱業㈱が取得し同 30 年代の休山まで稼行した（『新岩手県鉱山誌』）。

地質

元山鉱床及び蓬来鉱床はオルドビス－シルル系名目入沢層の粘板岩、石灰岩中に発達した熱水性含金タングステン石英脈である。第二女牛鉱床は下部白亜系山屋層の粘板岩中に発達した熱水性含金石英脈で、タングステンを伴わない。鉱石は各鉱床ともに乳白色緻密な石英からなり、母岩の薄層を取り込んだ重脈構造を呈することがある。一部に硫砒鉄鉱等の硫化鉱物やその酸化で生じた褐鉄鉱の濃集するものがあり、このような部分では稀に肉眼で自然金を認めることができる。タングステンは黄褐色の灰重石として石英中に散在しているが鉱量はわずかである。

遺構

元山鉱床には立坑跡を中心として、西側にはズリ山と製錬所基礎が残るほか、南東斜面には広範囲にみよし掘りの跡が点在している。蓬来鉱床には旧坑（大切坑または宝来坑とも）が現在でも入坑可能な状態で残存し、この南側にはズリを利用したテラスがある。第二女牛鉱床には女牛沢支流の六十目沢と五両沢の分岐付近に旧坑跡があり、最近まで入坑可能な状態だったとされるが、現在は旧坑跡上部に林道を開設した際の土砂で坑口がほぼ埋没している。

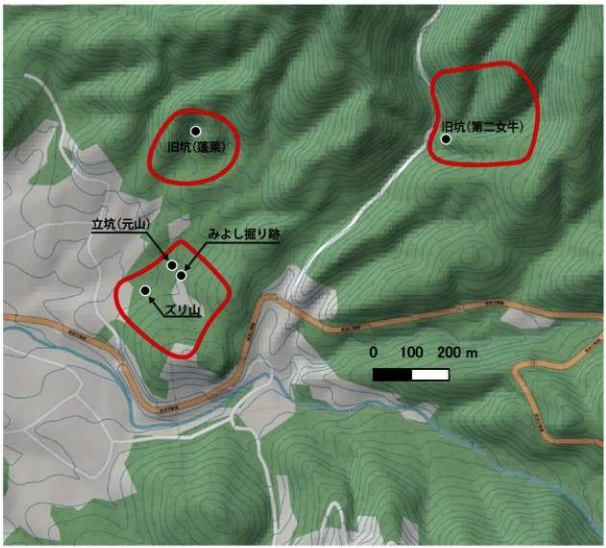


図18　女牛金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

4-9. 百澤金山（船久保字百沢）

位置・名称

立野山（286.5m）の北東約 300m の沢沿いに旧坑跡およびズリが残存する。

沿革

文政 3 年（1820）に開発されたとする記録がある（『紫波町史』第一巻）。下って明治 20 年（1887）に村上和三郎氏が開発したがわずか 6 か月で廃業している（荒屋敷工藤家文書）。同 43 年（1910）には秋田県の竹村鉱業が取得して採掘を行い捲鉱機も設けたようであるが（百澤金山竹村鉱業事務所文書）、その後まもなく放棄されたものと思われる。

地質

鉱床は下部白亜系山屋層中の凝灰岩、粘板岩中に発達した熱水性含金石英脈である。鉱石は乳白色緻密な石英からなり、多量の褐鉄鉱を含む部分には肉眼的な自然金が見られる。また、褐鉄鉱の一部は六面体の黄鉄鉱仮晶として存在する。

遺構

現在では沢沿いに旧坑跡とされる場所と極小規模なズリが残されているに過ぎない。しかし、赤沢郷土資料館所蔵の「百澤金山竹村鉱業事務所」銘の墨書看板や「百澤金山竹村鉱業事務所文書」、さらに金山の事務印など明治期の鉱業関連史料が纏まって残されており、当時の経営の実態を知ることができる貴重な金山である。また、立野山の北約 400m の紫野字外野に現在でも入坑可能な旧坑が残存するが、これは戦時中に金生鉱山と称して層状含マンガン赤鉄鉱を採掘した鉄鉱山跡である。

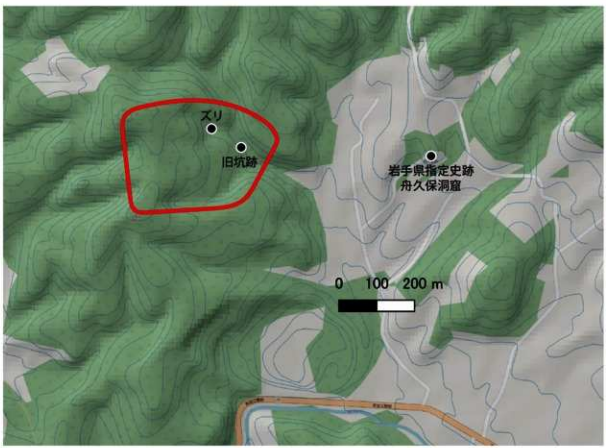


図 19 百澤金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

佐比内地区（紫波町佐比内）

4-10. 佐比内金山（佐比内字正分沢）

位置・名称

大盛山（302.5m）の西斜面および南東斜面に旧坑が残存する。かつては大盛金山もしくは大森山金山と称して稼行されたという。また付近には増ケ沢金山、平栗金山等があったとされるがいまだ確認できていない。

沿革

開山時期を示す史料や伝承は残されていないが、大盛山の周辺には金座や三十枚平と称する場所があり、古くから盛大に稼行されていたようである。大盛山の名称はお椀を伏せたような均整のとれた山容に由来するといわれるが、金山の繁栄を意味する大盛（たいせい）に由来する可能性もある。大正６年（1917）に福島県の斎藤氏により佐比内金山と称して旧坑の再開発が行われたが、昭和 18 年（1943）に金山整備令の対象となり休山を余儀なくされ（『新岩手県鉱山誌』）、戦後再開し岩崎初太郎氏の所有となる（『紫波町地下資源調査報告書』）もすでに良鉱はほとんど残されておらず、まもなく廃山となった。

地質

下部白亜系山屋層の粘板岩および凝灰岩中に発達した熱水性含金石英脈である。鉱石は乳白色緻密な石英からなり、まれに母岩の角礫を取り込み、一部には多量の褐鉄鉱を伴う。

遺構

大盛山の西斜面に大切坑、南東斜面に竪坑が残存し、両坑とも半ば水没しているものの現在まで大きく崩落せずに残されている。

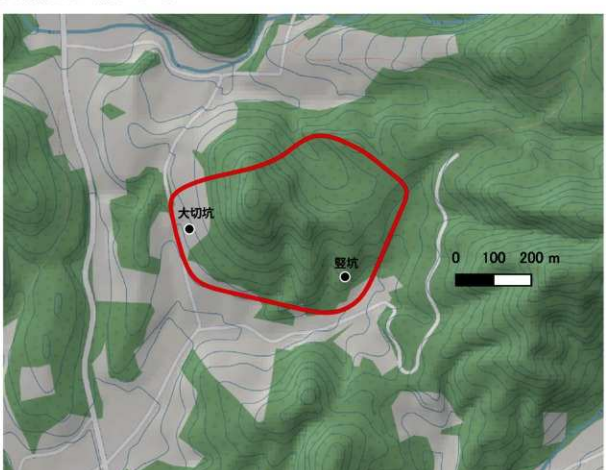


図 20　佐比内金山遺構分布状況（1/10000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

4-11. 早池峰金山（佐比内字砥ケ崎）

位置・名称

佐比内字砥ケ崎の洞ケ沢と朴沢、謡沢に沿って採掘跡と関連遺構が点在する。かつて盛岡藩最大規模の金山として名をはせた洞ケ沢・朴木両金山である。

沿革

洞ケ沢上流部で稼行された洞ケ沢金山は史料に乏しく、わずかに享保 16 年（1731）の開発（『紫波町史』第一巻）を伝える記録があるのみである。洞ケ沢の尾根を挟んで南側を並走する朴沢では、その最上流部の六千枚平において元和 8 年（1622）から朴木金山（朴または厚朴とも）が開発され、金山師の丹波弥十郎が大判 6,500 枚の運上金でその採掘を請け負ったとされる。最盛期には金山の人口が 13,000 人、戸数 2,120 軒に達し、遊郭には江戸から 300 人、仙台からも 250 人の遊女が集まった他、角力や歌舞伎の興行も行われる賑わいぶりで、六千枚平の北の宮古平と称するところはこの頃宮古からの遊女が多く移り来た場所と伝わる。また別に朴木山の内として香番金山や朴大岩金山、五枚平金山などの名前も知られるが、これらは朴木金山における山師ごとの堀場（坑道）の名称と考えられる。承応 4 年（1655）にはすでに五枚平が平右衛門掘捨間符（廃坑）として見える（『紫波町史』第一巻）など、わずか 30 年ほどで開発は減衰し、以降は近代にいたるまで断続的かつ極小規模な再開発が行われるのみとなった。近代に入ると洞ケ沢、朴木の両金山で再開発が試みられたようであるが、その沿革は明確ではない。戦後も数代の所有者によって両金山の探査が進められ、後に三菱金属鉱業㈱が両金山を合わせて早池峰金山と改称し昭和 60 年代まで探査を行ったものの、良鉱は発見されずまもなく放棄された（『新岩手県鉱山誌』）。

地質

洞ケ沢、朴木両鉱床ともにペルム系内川目層の粘板岩中に発達する熱水性含金タングステン石英脈である。鉱石は乳白色緻密な石英からなり、母岩の薄層を取り込んだ重脈構造が顕著に観察できる。自然金は石英脈と母岩の境界である盤際に硫砒鉄鉱や黄鉄鉱等の硫化鉱物とともに濃集しており、このような高品位部では肉眼的な自然金の産出も稀ではない。タングステンは黄褐色の灰重石として石英中に散在しているが、女牛金山と同様に鉱量が限られ本格的な稼行には耐えない。

遺構

朴沢最上流部には朴坑跡と朴鉱山事務所の建物が残存する。また周辺にはズリによって多数のテラスが形成されており、長い期間採掘が行われてきたことを物語っている。朴沢中流部の北斜面には住居や山神社跡と推定される石垣の基礎があり、周辺の地表には陶器、ガラス器や様々な日常雑器が散在している。洞ケ沢上流にも旧坑跡と思われる箇所が複数存在するが、朴沢ほど遺構は残されていない。朴沢下流部北斜面の広い平坦地は精錬所跡、謡沢南斜面の数段のテラスは遊郭跡とされるが、これらの表面には厚く腐葉土が堆積しており、以前精錬所跡から製錬用石挽き臼が発見されたほかに時代を決定できるような遺物は確認されていない。

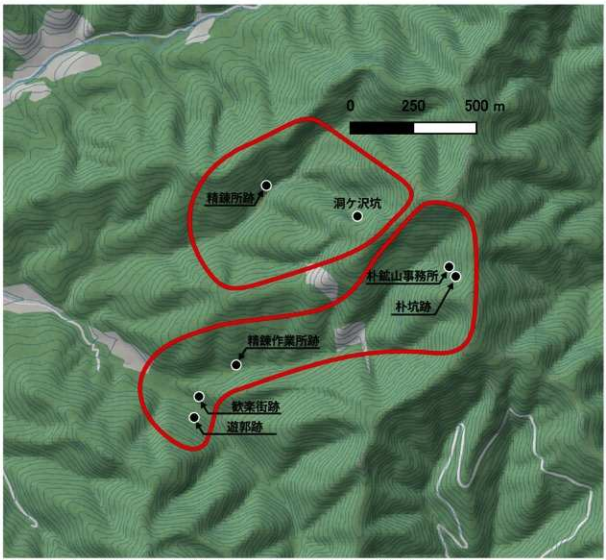


図 21　早池峰金山遺構分布状況（1/15000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

4-12. 宝栄金山（佐比内字田屋）

位置・名称

新山（250m）の南約 500m に旧坑跡および関連遺構がある。かつては雀坂金山と称して稼行された。

沿革

近代以前の本金山に関する史料は残されていないが、雀坂の地名はかつて雀ほどの大きさの金塊が採れたことに由来すると伝わり、新山の北側を通る小豆坂も小豆ほどの金粒が採れたことが由来とされるなど、古くから産金と結びついた地域であったことを伺わせる。また、万治２年（1659）に開発された釜ケ沢金山（『紫波町史』第一巻）が本金山の一部とされる（『紫波町史』第２巻）が、現在釜ケ沢の地名を見出すことができず関連は不明である。昭和 11 年（1936）から東京の武藤精行氏によって稼行され相当量の産金があった（『紫波町地下資源調査報告書』）という。

地質

時代不詳の粘板岩および流紋岩中に発達した熱水性含金石英脈で、鉱床の東部では不毛石英脈に遷移する。鉱石は乳白色緻密な石英からなり、母岩の角礫が多く取り込まれるとともに褐鉄鉱による汚染が著しい部分がある。

遺構

山地の西縁に旧坑跡が残存するほか、付近一帯には広範囲にズリの堆積が見られ、往時盛大に稼行されたことを伺わせる。また、中山（230m）の西麓にあたる佐比内川の屈曲部にはこの頃のものと思われる製錬所の基礎が残存している。新山の南東斜面の佐比内字鴨目田には本金山の東方延長の不毛石英脈を白珪石として採掘した朝日鉱山がある。

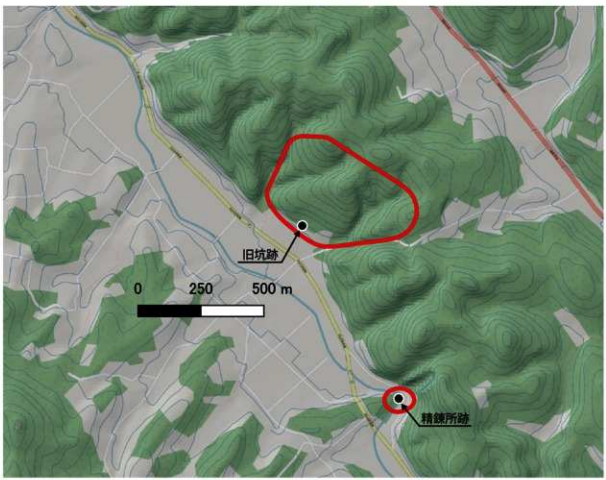


図 22　宝栄金山遺構分布状況（1/15000,OpenStreetMap 及び国土地理院基盤地図情報を元に作成）

参考資料

1 荒屋敷工藤家文書（紫波町教育委員会所蔵）
2 大迫町史編纂委員会『大迫町史』（大迫町、1973）
3 兼平賢治「近世の石碑からみる地域の歴史－岩手県内の石碑調査をとおして－」（『岩手史学研究』第 100 号 ,2019）
4 川村寿郎・内野隆之・川村信人・吉田孝紀・中川充・永田秀尚「早池峰山地域の地質 地域地質研究報告 5 万分の 1 地質図幅秋田 (6) 第 24 号」（独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター、2013）
5 北村家文書（個人蔵）
6 紫波町史編纂委員会『紫波町史』第 1 巻（紫波町、1972）
7 紫波町史編さん委員会『紫波町史』第 2 巻（紫波町、1984）
8 高橋維一郎・南部松夫『新岩手県鉱山誌』（東北大学出版会、2003）
9 日本金山誌編纂委員会『日本金山誌 第 3 編東北』（社団法人資源・素材学会、1992）
10 厚朴金山覚書状（紫波町教育委員会所蔵）
11 藤原兼実『玉葉』（国書刊行会、1907、国立国会図書館デジタルライブラリー参照）
12 村井貞允・高橋維一郎・堀内孫十郎・佐藤昌晫『紫波町地下資源調査報告書』（紫波町、1956）
13 百澤金山竹村鉱業事務所文書（紫波町教育委員会所蔵）

写　真　編

図 23-24　大日向金山
図 25-26　長福金山
図 27　赤坂金山
図 28　仙北沢金山
図 29-32　赤澤金山
図 33　漆山金山
図 34-35　寒風金山
図 36-40　女牛金山
図 41　百澤金山
図 42-43　佐比内金山
図 44-47　早池峰金山
図 48-49　宝栄金山

図 23　小丘陵西端の旧坑跡

図 24　製錬所の基礎遺構

図 25　丘陵上の溝状採掘跡

図 26　金山地之神石碑

図 27　尾根南斜面の旧坑跡

図 28　小丘陵北斜面の溝状の採掘跡

図 29　三角山北斜面の旧坑跡

図 30　金が沢の赤沢金山山神石碑

図 31　製錬所の基礎遺構

図 32　牛ケ馬場地内の製錬用石挽き臼（下臼）

図 33　添山金山採掘跡の最上部

図 34　寒風山北西斜面の旧坑跡

図 35　赤沢小学校遠山分校跡の台地

図 36　元山鉱床の立坑跡

図 37　元山鉱床のズリ山

図 38　元山鉱床のみよし掘り跡

図 39　蓬来鉱床の旧坑

図 40　第二女牛鉱床の旧坑跡

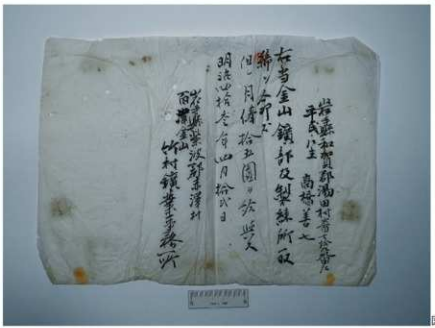


図 41　百澤金山竹村鉱業事務所辞令

図 42　大盛山西斜面の大切坑

図 43　大盛山南東斜面の竪坑

図 44　早池峰金山朴坑跡

図 45　朴木金山精錬所跡とされる平坦地

図 46　朴鉱山事務所

図 47　遊郭跡とされるテラス

図 48　宝栄金山旧坑跡

図 49　佐比内川沿いの製錬所の基礎遺構

資　料　編

（１）金試料の分析
（２）佐比内北村家金山証文

（1）金試料の分析

本報告書の作成にあたり、紫波町産の自然金のうち山金（鉱石中の自然金）２点、砂金（漂砂中の自然金）１点、さらに南日詰小路口Ⅰ遺跡（南日詰字小路口）出土の金付着片口鉢１点の合計４点の試料について、構成元素とおおまかな含有量を明らかにすることを目的として、岩手県工業技術センターにエネルギー分散型Ｘ線分光法（ＥＤＸ）による分析を依頼した。

試料の剪定

分析に用いた自然金のうち、山金は紫波町東部を代表する金鉱床である早池峰金山朴坑産１点（試料１）、女牛金山元山鉱床産１点（試料２）、砂金は近代まで採掘が行われていた赤沢川産１点（試料３）である。

南日詰小路口Ⅰ遺跡は比爪藤原氏の拠点である比爪館の東に隣接し、比爪館とともに比爪の中心部を構成していたと推定される１２世紀の遺跡で、試料３の砂金の採取場所から見て西にわずか５kmの場所にある。本遺跡から出土した常滑窯産金付着片口鉢の底部片（試料４）は砂金の加工に使用したと考えられるもので、現地の砂金をそのまま用いた可能性のある藤原氏時代の遺物として合わせて分析を行った。

肉眼観察

試料１の山金は、母岩の薄層を取り込んだ重膜構造を呈し褐鉄鉱に汚染された乳白色緻密な石英中に、硫砒鉄鉱・黄鉄鉱等の硫化鉱物に伴って約 0.4mm の粒状で産したものである。

試料２の山金は、褐鉄鉱に汚染された乳白色緻密な石英中に約 0.5mm の粒状で産したもので、硫砒鉄鉱がわずかに見られるほかは他の金属鉱物を伴わない。

試料３の砂金は最大長１mm 以下で、針金状のものがわずかに見られるほかは丸みを帯びた平板状やそれが折りたたまれたような形状を呈し、長期間漂砂中にあって摩耗を受け細粒化したものと思われる。

試料４は厚さ 1.3 ～ 1.1cm、台高 1.0cm、高さ 3.5cm 以上、底径 14.4cm の片口鉢の底部片で、破片の内面に薄く張り付くように金が点在しているものである。

図 50　試料１（早池峰金山朴産）

図 51　試料 2（女牛金山元山鉱床産）

図 52　試料 3（赤沢川産砂金）

図 53　試料 4（南日詰小路口 I 遺跡出土土器）

分析装置と条件

分析にはエネルギー分散型微小部蛍光X線分析装置（AMETEK・EDAX Orbis）を用い、X線管ターゲット：ロジウム、分析径：0.03mm、真空雰囲気の条件で定性・半定量分析（標準物質/Au99.99%粉末）を行った。非破壊による表面分析を行い、分析箇所により結果が大きく異なる試料1・2・3については特徴的と思われる2箇所の結果を用いた。

分析結果

各試料の分析で得られた定性分析チャートと半定量値を以下に示す。

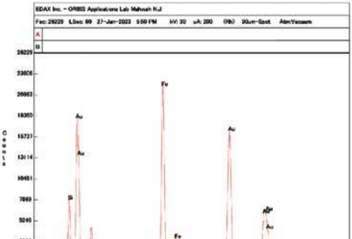
試料	アルミニウム (Al)	けい素 (Si)	鉄 (Fe)	銀 (Ag)	金 (Au)
試料1	1.5	14	9.6	14	61
試料2	―	―	―	8.7	91
試料3	―	2.9	―	―	97
試料4	0.9	1.8	―	―	97

表2　金試料分析結果一覧　　単位：%（質量分率）

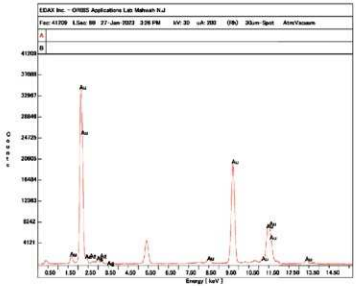
試料1の山金は銀を多く固溶したエレクトラムElectrumで、熱水鉱脈金鉱床に産する山金の典型的なものであることが分かった。試料2の山金も同様に銀を固溶したエレクトラムだが、その銀含有量は試料1に比べて明らかに少なく、金品位は後述する試料3の砂金に近い。

試料3の砂金は高い金品位を示したが、これは表面の分析結果である。砂金の表面は河川中で銀を失って高い金品位を示すことが知られており、銀を多く固溶した山金が元となった砂金では内部に多くの銀を含有するのが普通である。しかし試料2のようにもともと金品位の高い山金が上流に存在することや、細粒化した砂金の表面と内部がともに高い金品位を示す場合もあることから、本試料も内部まで高い金品位を示す可能性があるが非破壊のため内部の分析は行わなかった。北上山地の一部の金鉱床に伴う辰砂・自然水銀由来の水銀、テルル金銀鉱・テルル蒼鉛鉱等由来のテルル、ビスマスといった産地を特徴づけるような元素は検出されなかった。

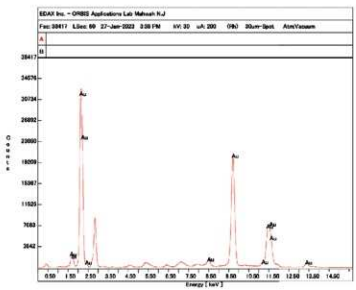
試料4の金付着片口鉢の金部分は試料3の砂金の分析結果と類似し、現地産を含む砂金をそのまま原料に用いて加工が行われた可能性を支持する結果となった。



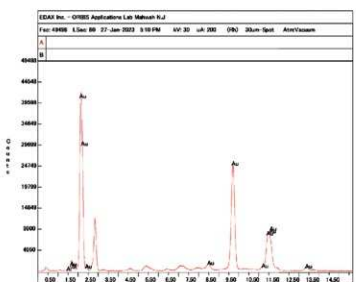
試料1（早池峰金山朴坑産）の蛍光X線スペクトル



試料 2（女牛金山元山鉱床産）の蛍光 X 線スペクトル



試料 3（赤沢川産砂金）の蛍光 X 線スペクトル



試料 4（南日詰小路口 I 遺跡出土土器）の蛍光 X 線スペクトル

（2）佐比内北村家金山証文

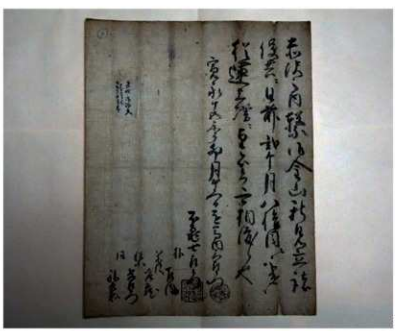
紫波町佐比内地区に先祖を持つ、北村任氏宅（盛岡市在住）には佐比内地区の金山に関する文書群が保管されている。『紫波町史』第一巻において「佐比内北村文書」として紹介された史料である。兼平賢治氏によって詳細に報告されており、紫波町内の金山に関する文書資料として貴重であることから、その内金山証文 11 点を掲載する。掲載に当たっては北村氏及び兼平氏に承諾を頂いた。

北村家は、祖先が近江国野洲郡北村に住んでいたことから「北村」を名乗ったとされ、寛永年間（1624 ～ 1644）に佐比内に移り住み、丹波弥十郎のもとで手代として勤めていたという。北村家は、金山開発と経営に携わることで財を蓄え、佐比内村の有力者の 1 人となったとされる。当主の多くは三右衛門を襲名しており、当初は金山経営を生業とし、金山景気の衰微と共に酒造業に転業したが、延享 4 年（1747）には和泉屋市十郎にその株を譲って廃業した。

【参考】

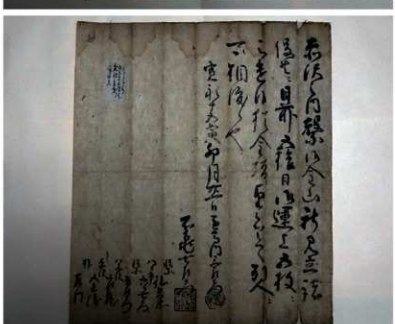
紫波町史編纂委員会「紫波町史 第一巻」（紫波町、1972）

兼平賢治「近世の石碑からみる地域の歴史－岩手県内の石碑調査をとおして－」（『岩手史学研究』第 100 号 ,2019）



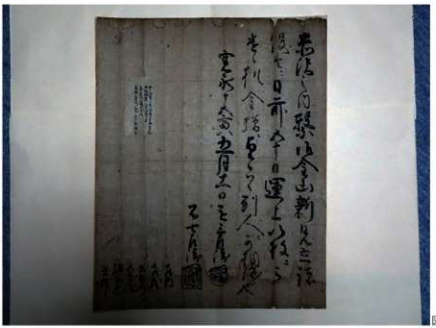
【金山証文（1）（寛永二五年（1638））】
赤沢之元鉱御金山新吹諸役共二日前九ヶ月八拾日三被遣候、猶金壱二望者候へ、可相渡候也、
寛永十五年卯月十二日　　毛馬内三左衛門（印）
石亀七左衛門（印）
朴　　繁　孫兵衛
左内　　八日市　毛馬内三左衛門（印）
八木沢　庄蔵　　繁　六郎右衛門
同　　繁　兵左衛門
孫兵衛

図 54　金山証文（1）32.6cm × 25.4cm



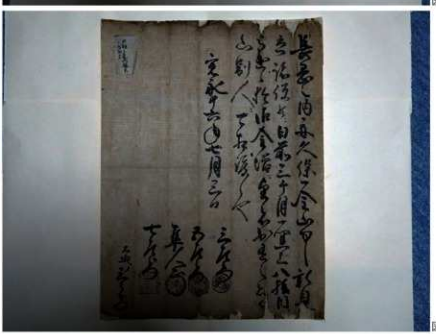
【金山証文（2）（寛永一五年（1638））】
赤沢之元鉱御金山新吹諸役共二日前九拾日御運上五枚二
被遣候、猶金壱二望者候ハ、別入二可相渡候也、
寛永十五寅卯月廿一日　　毛馬内三左衛門（印）
石亀七左衛門（印）
繁　孫兵衛
八日市　毛馬内三左衛門（印）
繁　六郎右衛門
八木沢　庄蔵　　繁　兵左衛門
赤沢　五兵衛
朴
左内

図 55　金山証文（2）34.0cm × 28.7cm



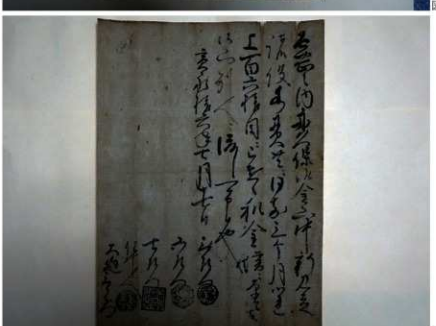
【金山証文（3）（寛永一五年（一六三八））】
赤沢之内鰐御金山新見吉隆役共二日前廿一日運上八枚三被遣候、猶金増二望候ハヽ別入二可相渡也、
寛永十五寅九月廿一日
毛　三左衛門（印）
石　七左衛門（印）
左内
庄蔵
兵左衛門
五兵衛
孫兵衛
兵作

図 56　金山証文（3）34.2cm × 27.2cm



【金山証文（4）（寛永一六年（一六三九））】
長岡之内舟久保御金山中新見吉隆役共二日前三ヶ月御運上八拾目二被遣候、猶御金増二望者給り之候ハヽ　御山別入二可相渡候也、
寛永十六年七月三日
三左衛門（印）
五左衛門（印）
隼人正（印）
七左衛門（印）
大道ノ三郎右衛門

図 57　金山証文（4）34.9cm × 26.0cm



【金山証文（5）（寛永一六年（一六三九））】
長岡之内舟久保御金山中新見吉隆役共二日前三ヶ月御運上百六拾目二被遣候、猶金増二望候ハヽ　御山別入二可申候也、
寛永拾六年七月十七日
三左衛門（印）
左衛門（印）
七左衛門（印）
隼人（印）
大道
三郎右衛門

図 58　金山証文（5）33.1cm × 24.2cm

【金山証文（6）（寛永十五年（1638））】

佐渡国内之内千葉郷金山前後境目被遣候、筋二通候ハゝ忠
金林切取之、日前可被遣候、隠置（密）仕輩有之者申上候ハゝ可
為御事候也、但日前三ヶ月
正保三年　十二月七日

栖山左衛門（印）
七戸隼人正（印）
横町三右衛門

図 59　金山証文（6）31.9cm × 17.4cm

【金山証文（7）（慶安三年（1650））】

佐渡国内中尾澤山金山之新見ヶ様遣候、定而内之外国田畑竹木
無構候、日前三ヶ月被遣候、金筋二通候ハゝ、忠金林切取之
日前可被下候、隠置仕候手前見ヶ偽申候ハゝ可為御事者也、
慶安三年庚寅三月十七日

清三勘左衛門（印）
石甘伊賀（印）
八日弥六郎（印）
横町三右衛門

図 60　金山証文（7）32.3cm × 27.3cm

【金山証文（8）（承応二年（明暦元年（1655））】

其御領金山五枚之内、右衛門三郎（印）・喜内水抜堅候
付而被仰付水抜引立候ハゝ、忠金林切取之日前可被下候、
五所七所之道具候共、普請人用ニ可仕候、縦銀札成とも宜
金林有之か、水抜為候ハゝ可為御請候也、
承応四乙未年二月十七日

兵助（印）
藤右衛門（印）
弥六郎（印）
横町三右衛門

図 61　金山証文（8）32.5cm × 36.8cm

【金山証文（9）（万治元年（一六五八））】

杜御金山六千枚半御役弥千郎御渡し口永後開府之外
堀（掘）借新見立御役共口銀九ヶ月御渡し金九匁二被遣候、
猶金増三望候ハヽ御山間入二相渡候也、
万治元年後十二月七日　藤右衛門（印）
九左衛門（印）
弥六郎（印）
三平
弥十郎

図 62　金山証文（9）32.0cm × 21.9cm

【金山証文（10）（万治二年（一六五九））】

佐比内之内弐ヶ所御金山与七郎屋（掘）借開府壱口永
後望候付、銀番開府之外五四屋之通見候共、一切
請入用ニ可仕候、水抜付弐口候ハヽ必金林切取之口前
可渡下間、銀掘之金林隠密ニ而掘（掘）取仕か、水後偽候ハヽ可為曲事者
也、
万治二年二月廿二日　藤右衛門（印）
九左衛門（印）
弥六郎（印）
佐比内之
助九郎

図 63　金山証文（10）32.3cm × 35.5cm

【金山証文（11）（万治三年（一六六〇））】

赤水仕舞間下小豆沢保合之外銀別定ニ而下分、当年中
川根之御運上金壱匁ニ三貫被遣候、常間水目間無構
所川筋可仕候、猶金増三望候ハヽ別入可相渡候也、
万治三年八月八日　助左衛門（印）
藤右衛門（印）
弥六郎（印）
杜澤之
与右衛門

図 64　金山証文（11）33.7cm × 26.7cm

町内金鉱山遺跡詳細分布調査報告書

令和５年３月 28 日

編集・発行　紫波町教育委員会
〒 028-3392　岩手県紫波郡紫波町紫波中央駅前二丁目３番地１
☎　019-672-2111　FAX　019-672-1553
印　　刷　永代印刷株式会社
〒 020-0857　岩手県盛岡市北飯岡一丁目８番 30 号
☎　019-636-0011　FAX　019-636-0099